

マムルーク朝時代カイロのムフタシブ

——出身階層と経歴を中心に——

菊池忠純

一

これまでマムルーク朝のムフタシブ (mufṭasīb 市場監督官) については、Ibn al-Ukhuwwa (721/1329^後) に代表されるヒスバの書の分析により職務内容を述べるか、あるいは穀物騒乱時に、スルタンの政策を遂行しているムフタシブの行動を考察するかが研究の中心であった。⁽¹⁾ ムフタシブの出身階層については、A. Darrāǧ と Abd ar-Razīq の研究がある。⁽²⁾ 前者は、al-Maqrīzī が十五世紀初頭以降のエジプトの飢饉と高物価という災禍の原因の第一にあげている行政職や宗教職 (ヒスバ職を含む) における賄賂 (riḥwa) の横行による腐敗に注目してヒスバ職を研究し、以下の三つの理由によりヒスバ職が機能しなくなったとする。それは、有力アミールの介入、baḥī の横行、スルタン al-Muḥayyad Shaykh 時代以降ウラマー以外にマムルークがムフタシブになったことである。後者は、前者の研究を進め、より詳細に論じたもので、賄賂の額についてのリストやムフタシブとなったマムルークのリス

トをあげて整理している。また、各ムフタシブについて名前、在職時期、史料をリストにして付している。しかし、両者に欠けているのは、各ムフタシブについて具体的にその経歴が明らかになっていないこと、十五世紀以前のムフタシブについて考察されていないこと、また十五世紀以降についても、類型的な把握のみで歴史的な展開が述べられていないことなどである。'Abd al-Raziq のムフタシブについての詳しいリストも、名前、在職時期、出典について、多くの誤りが見付けられる。

マムルーク朝の歴史家は、自らムフタシブの経歴を持つ al-Maqrizi (845/1442没)、al-'Ayni (855/1451没) は言うまでもなく、他のアラビア語史料もムフタシブについて多くの記述を残しており、特にカイロについては、史料に精粗はあっても、マムルーク朝全期にわたってムフタシブを迎えることができる。

本稿では、マムルーク朝時代カイロのムフタシブについて、特に出身階層と経歴の変化を中心に述べる。先ず、制度上のムフタシブについて考察し、次にマムルーク朝初期から816/1413年のマムルーク Mankali Bugha (no. 113)⁽⁴⁾ の登場まで、次に、彼以降マムルーク朝初期のカイロのムフタシブ Mamāy as-Sughayr (no. 182) までは述べ、最後に、以上の経過を整理して、ムフタシブの性格を明らかにしたい。

二

ヒスバ職は、ヒスバの書などの規定によると、マムルーク朝の官職のなかでも特に重要な職である。その目的は、しかるべき善行を勧め、悪行を禁ずる (amr wa-n-nahy) という宗教的義務を遂行し、食料、商品の詐欺や度量衡

のごまかしが行なわれていないかを調べることであり、宗教職の第五位におかれる職であった。したがって、ムフタシブは、イスラム教徒であるばかりでなく、誠実な者 (a'yan al-mu'adalin) であると同時に、法学者 (faqih) でもなければならぬ。⁽⁵⁾ al-Qalqashandiによれば、エジプトには、カイロと下エジプト(独自のムフタシブがいるアレキサンドリアは除く)を管轄する「カイロのムフタシブ」とフスタートと上エジプトを管轄する「フスタートのムフタシブ」がいる。法廷 (dar al-'adl) で席を占めるのはカイロのムフタシブのみであり、席順は国庫長官 (wakiil bayt al-mal) に次ぐが、宗教的知識 ('ilm) が優れていれば、その上位になる。⁽⁶⁾ また、職務遂行には、代理人 (na'ib) や助手 ('aun) を使っていた。al-Maqriziによれば、「任命されると、フスタートとカイロのモスクの説教壇で名が読まれ」、「職務に、他の者が干渉することはできないが、必要に応じて総督 (amir) が彼を助ける」とあり、彼の給与 (jarin) は毎月三〇 dīnarであった。⁽⁷⁾

マムルーク朝時代には、カイロについて延べ一八二人、実数九〇人のムフタシブが確認される。⁽⁸⁾ ハフリー・マムルーク朝 (1250—1390) とブルシー・マムルーク朝 (1382—1517) とを比較すると、1382年以前は、延べ三〇人、実数二一人に対して、この年以降は、延べ一五三人、実数六九人である。この変化が、いかなる原因によるものか、以下時代順に述べ、また前述のムフタシブの規定は、どの時期を反映しているかについても述べてみよう。

三

1. Taj ad-Din al-'Alāmi (no. 1) から Jamāl ad-Din al-'Ajāmi (no. 30) まで (789/1387*)

マムルーク朝時代カイロのムフタシブ 菊池

第六十四巻 一三三

Taj ad-Din al-'Alami (no. 1)⁽⁹⁾ 及び Zayn ad-Din al-'As'irih (no. 6) まづは、ムフタシブとしての活動は史料に詳しくは述べられていない。しかし、それらの経歴を見れば、ムフタシブとしての理想像に相応しい有力な法官が就任していることが明らかである。それはマムルーク朝創始期の時代を反映しているといえよう。また何人かのムフタシブに血縁関係がみられることは、⁽¹⁰⁾血縁関係のあるウラマーが従事すべき職と見なされていたといえよう。Jamal ad-Din al-'Ajami (no. 30) まづのムフタシブは、多くは、国庫長官とキスフ管理 (naẓir al-kiswa bi-dār al-irāz) を兼任してゐるが、これは二つの職に相互に関連する業務があつたことを示している。

Najm ad-Din al-'As'irdi (no. 7) に「いつ、736/1336年、小麦の高価格を利用して投機を計る者がいたとき、スルトン an-Nāsir Muhammad は、彼に行動を促したが、彼は手を下さず、カイロ総督 (wali al-Qahira) が粉引き屋とパン屋を罰した⁽¹¹⁾。この記事では、ムフタシブが価格について市場に介入することを控えていることが注目される。⁽¹²⁾これは珍らしい例で、以降多くの場合ムフタシブは、価格の決定 (qasr) に関与している。

同年 Diya' ad-Din ash-Shāmi がフスタートのムフタシブであつた時、小麦価格が高騰した。スルトン an-Nāsir Muhammad は、彼をミール al-Akuz に命じて、アミールたちの穀物倉 (shūna) にある小麦の量と各アミールの必要量を調査させ、新規に穀物が到着するまで、仲買人 (simār) や代理人 (amin) や計量係 (kayyāl) に、許可なく穀物倉を開くことを禁止した。ムフタシブは毎日、穀物倉に行き、先ず、粉引き屋に一アルダブ三〇斗 (ṭham) で売却させた。二人のアミールがその命令に従わずに高価で売却したが、スルトンは「エジプトを荒廃させたいのか。私の布告 (marṣūm) を覆すのか」と叱り、二人を罰した。以降ムフタシブの許可なく穀物倉を開ける

アミールはいなくなつた。⁽¹³⁾ *Diya' ad-Din ash-Shami* は、この手腕をかわれ、翌年、カイロのムフタシブ (no. 8) に任命された。スルタン an-Nāṣir Muḥammad は、彼をムフタシブにすること、アミール勢力を押し、市場管理を計ったと考えられる。しかし、アミールの反対があり、*Diya' ad-Din ash-Shami* をムフタシブとすると同時に、アミール Qūṣūn と Aqbughā 'Abd al-Wāhid の推挙 *Shihāb ad-Din Ibn al-Ṭabbakh* を *ḥisba ad-dakḥkhan* につけ「料理屋 (*ṭabbakh*) や菓子屋 (*ḥalwā'i*)」について責任を持たせ、*ḥisba* のベンチ (*ḍikka al-ḥisba*) に坐り、煙を出す職種 (*arḥāb ad-dakḥkhan*) を管理させた⁽¹⁴⁾とあるように、その改革も、所期の目的を達することはできなかった。

ḥisba 職をめぐってアミールがその任免に介入することは、後期になるほど頻繁となる。*Diya' ad-Din ash-Shami* (nos. 8, 10, 12) と '*Ala' ad-Din as-Saqā'i* (nos. 11, 13) は、*ḥisba* 職と病院管理の職 (*naẓar al-maristan*) を争ったことで名高く、それぞれ有力アミールの仲介 (*bi-sīṭara*) や後援 (*bi-'ināya*) を得て任命されたとされている。しかし両者とも、著名な宗教人であり、立派な施策を行ない、エジプト人の好意を得た人物であると好意的な記述がみられる。

シリアでは、762/1360—61年に、ムフタシブや助手 (*'ard*) を通じて徴収された市場税の廃止が、はじめて伝えられている。⁽¹⁵⁾ 当時エジプトでは *Burhān ad-Din al-Akhnā'i* (no. 17) がムフタシブであったが、彼の時代については、*ḥisba* が最も良く機能し、その下で人びとは生計をたてることができたと言われている。⁽¹⁶⁾ しかし、775/1373年カイロで、ムフタシブ '*Ala' ad-Din Ibn 'Arab* (no. 21) に対して、人びとは免職を求めた。スルタンはこの要

求を入れて彼を罷免した⁽¹⁷⁾。彼の悪い点として、Ibn Iyas は、彼は小商人からの賄賂 (barīl as-sūga) をとり、商品 (badai') の価格を定めず、そのために、人びとに大きな損害を与えたと伝えている。⁽²⁹⁾ すなわち、シリアにおけるような市場税は、カイロではまだ報告されていないが、賄賂 (barīl) という形で、ムフタシブからスルタンやアミールへ上納金が納められていたと考えられる。

Jamal ad-Dīn al-'Ajami (no. 24) が任命されたとき、人びとは彼を軽蔑していたと言われている。それは、⁽¹⁹⁾ 彼がエジプト人でなく、しかも病院の前でなつめやしの実を販売していたことがあったという経歴のためであった。

しかし、彼の経歴と後にムフタシブになった小商人出身の人物 (Sams ad-Dīn al-Iskandarāni (no. 55), Taj ad-Dīn al-Miṣri (no. 69), Sharaf ad-Dīn al-Hiriri. (no. 93), 'Alī ad-Dīn 'Alī (no. 142), Shughayra al-Qāhiri (no. 165) 〇五名) の経歴を比較すると、彼は彼以後の五名と違い、法学を学び、法学者 (faqih) と称されているので、ムフタシブとしての資格に欠ける者ではなかった。実際、彼は大胆に任務を遂行する人物で、彼がヒスバ職に就くと物価が安定し、逆に免職されると上昇した。そのため人びとは一致して彼の再任を求めたとある。年代を追って史料をみると、⁽²⁰⁾

779/1377年 Shams ad-Dīn ad-Damiri (no. 25) の免職は、前任者 Jamal ad-Dīn al-'Ajami (no. 24) の復帰を求め人びとがいたためである。782/1380年同じく Shams ad-Dīn ad-Damiri (no. 27) の免職は、ナイル川の水位の上昇が停止したために穀物価格が高騰し、人びとは穀物倉に殺到し Shams ad-Dīn ad-Damiri に投石して Jamal ad-Dīn al-'Ajami の再任を求めたためであった。同年 Jamal ad-Dīn al-'Ajami がムフタシブ (no. 28) に再任された際の人びとの歓迎ぶりは、al-Maqrizi によって詳しく伝えられている。大歓迎の理由として、市場

にパンが少なくなり、遂には全く見当らない日が何日か続いた。人びとは Jamāl ad-Dīn al-'Ajamī がヒスン職に復帰することで、この状態が改善されると期待したからであると述べている。事実、彼の復帰によって市場にパンが現われたと伝えている。⁽²¹⁾

カイロの物価高騰また穀物騒乱は、ナイル川の水位の増減がすぐ穀物価格にはね返るといふ短絡的な原因によるものもあるが、そのような際に、公正なヒスバを行うと期待された人物が、ムフタシブになると物価は安定した。人格的に優れていると思われる人物がムフタシブになることを要求する運動は、マムルーク朝時代を通じて何回もみられる。⁽²²⁾これは、民衆の側からみれば、スルタン、アミール、マムルークの市場介入に対する抵抗の一形態とみなすことができよう。

al-Maqrīzī の 779/1378 年の記述で、当時官職に就くには、アミールにとりなしを頼むことによって、また、法官、ムフタシブ、視察官 (Tashtī) その他の職については、金を支払うことによってのみ就くことができる。したがって下層民ですら、前述の立派な職に就くことができるようになり、そのため人びとは不幸の中に投げ込まれ、エジプト、シリアを荒廃させることになった。⁽²³⁾とある。また、783/1381 年 Barqūq は Jamāl ad-Dīn al-'Ajamī (no. 28) を免職したが、その背景として、スルタン az-Zahir Barqūq 時代の末期とスルタン an-Nasir Faraj の時代には、軍人やアミールの介入によって、法律家や法官の職に「王朝の人びと (ahl ad-dawla)」が就くようになった⁽²⁴⁾という事実が指摘されている。これらは Jamāl ad-Dīn al-'Ajamī について書かれたものであるが、正確には、次節で扱う時代のことを示したものである。

この時期、物価問題以外にムフタシブが係わっていることをみると、ムアッズィンに対して、以前にはなかった文言をアザーンに付け加えさせたり⁽²⁶⁾、ギーザのキリスト教会の鐘の音のために、モスクでのイマームの説教が聞けないという訴えを受けて、これを調査し、キリスト教会を廃し、モスクにしたことがあげられる⁽²⁶⁾。また新築されたザヒーリヤ学院において、ムフタシブとして説教をしている⁽²⁷⁾。これらは、ヒスバの書に規定されているムフタシブの宗教的職務を遂行していることの例となろう。さらに、789/1387年には、スルタン az-Zahir Barquq の命で、ティムールの遠征に対処するため、商人や富裕な人びと (arbab al-amwal) から、ザカート (zakat anwalihim) を徴集することを決定している⁽²⁸⁾。

2. Najm ad-Din al-Fanbudi (no. 31) か、Sadr ad-Din Ibn al-Adami (no. 112) か、^(816/1413*)

Najm ad-Din al-Fanbudi はムフタシブ (no. 31) 就任に際して、賄賂を使ったが、歴史書は、はじめてその金額を五〇〇〇〇 dirham fidda と明示している⁽²⁹⁾。これは以下に述べるようなヒスバ職をめぐる状況の変化によるものと思われる。

Najm ad-Din al-Fanbudi (no. 31) 以下 Sadr ad-Din Ibn al-Adami (no. 112) か、789/1387年から816/1413年までの二七年間に、延べにして、マムルーク朝時代一八二名のうち、約四五%にあたる八一名、実数にして二四

人のムフタシブが替っている。この二四人については、789年以前にムフタシブになった人物は一人も含まれていない。特に、頻繁に任免が行なわれた年をみると、802年六回、805年四回、806年九回、807年六回、808年一回、809年一回、812年一回、813年四回、814年五回となっている。この時期は、スルタン an-Nasir Faraj の時代であり、809年には、次のような記述がみられる。「この年と前後の年には、ヒスバ職について、聞くに耐えない愚かなことが起きた。一カ月に三、四人が(交替して)ムフタシブになった。」それは、毎月幾らかの金額を支払うことを条件に (bi-badh) ヒスバ職に就くが、より高額を支払う用意のある者が現われると簡単に交替させられたためであった。例えば、「Sadr ad-Din al-'Ajami (no. 110) は免職された後、支払いが遅れていた(上納金)五〇〇 dinār を要求され、所有物を売り、約三〇〇 dinār を持つてきた」という記述や、「Ibn Sha'ban (no. 111) は、ヒスバ職に就くの五〇〇 dinār 支払い、毎月一〇〇 dinār を支払うことになった」という記述は、これを示している。⁽³³⁾では、どのようにして、その金額を徴収したかが問題になるが、816/1413年スルタン al-Mu'ayyad Shaykh はムフタシブ Shams ad-Din Ibn Sha'ban (no. 111) を罷免したが、その理由として、彼は決定された額を支払うために違法な仕方で人々の財産を奪ったためとされているのを見れば、⁽³⁴⁾このような方法は当時のムフタシブの多くが行っていたものと思われる。

ムフタシブ二四人の経歴を調べると、ウラマーである六人 (Sirāj ad-Din al-'Ajami (no. 32), Taqī ad-Din al-Maqrīzī (nos. 56, 50, 68), Badr ad-Din al-'Aynī (nos. 47, 49, 53), Sadr ad-Din al-'Ajami (no. 72 六回), Zayn ad-Din ad-Damiri (nos. 103, 105, 109), Sadr ad-Din Ibn al-'Ādamī (no. 112)) を除くと、以前には見られなかったインターンを確認でき

る。それは、有力者 (ayān)⁽³⁵⁾、アミールの公証人 (shāhid)⁽³⁶⁾、スルタンづきのイマーム⁽³⁷⁾、スルタン直属のマムルーク (julān) のイマーム⁽³⁸⁾、その他スルタンやアミールに近侍している人物で、軍人以外の者が選ばれている。この時期、商人の経歴を持つ者も三名いるが、彼らは前述の Janāl ad-Dīn al-'Ajāmī (no. 24) とは違い、賄賂でヒスバ職を得た人物で、法学は勿論のこと知識はなかったといわれている。⁽³⁹⁾

また、ムフタシブの職掌について次の記事がみられる。796年 Dhū al-Qa'da 月/1394年八月九月、ナイル川の水位の上昇が止まり、大麦や小麦の価格が上昇した。そのため、人びとはムフタシブ Bahā' ad-Dīn Ibn al-Burjī (no. 36) に抗議し投石した。そこでスルタン代理 (nā'ib) は、カイロ総督 'Alā' ad-Dīn al-'Tablāwī に、物価について責任を持たせた。彼は粉引き屋や穀物仲買人に対して管理を強化するとともに、アミールたちに穀物倉を開けさせ、在庫の穀物を神の価格 (bi-sir Allāh) で売却させ、命令に従わない者を罰したといわれる。⁽⁴⁰⁾ Ibn al-Furāt は、この事件の際に、法官兼財務長官 (nāzīr ad-dawla) の Sa'd ad-Dīn Ibn al-Barqī が、カイロ総督によるヒスバ職の干渉には抗議し、これをスルタンに知らせると言ったと伝えている。⁽⁴¹⁾ これは、当時ムフタシブの職務にカイロ総督が介入することに反対の法官がいたことを示している。

一年後の798年 Muḥarram 月/1395年一〇—十一月、アミールの強制販売 (taḥ) により、小麦価格は高騰した。これに対するスルタンの介入も、強制販売の価格を少し下げたにとどまり、新たに小麦が上エジプトから到着したにもかかわらず、小麦価格は人工的に吊り上げられたままであった。粉引き屋とパン屋が、小麦粉とパンの生産量を落としたために、パンは市場からなくなり、人びとはパン焼き屋 (furn) に殺到した。そこで、Sharaf ad-Dīn al-

Iskandari (no. 39) は前述のカイロ総督 'Alā' ad-Dīn al-Ṭablawī と共に、粉引を屋を罰したが、効果がなかった。スルタン az-Zahir Barquq は 'Shams ad-Dīn as-Sa'īdī を「金を支払わせるとなく」ムフタシブ (no. 40) に任命して、同時にカイロ総督にも事態解決に当らせた。Shams ad-Dīn as-Sa'īdī はムフタシブ就任に際して、人びとに高価な穀物を購入させる政策—強制販売—を変更することを条件とした。⁽⁴²⁾ すなわちこれは、強制販売が行なわれ市場が混乱したこと、賄賂を出すことなくムフタシブに任命されることが珍らしかったこと、ムフタシブと総督が協力して事態解決に当たったことを示している。強制販売は、特に、ブルジー・マムルーク朝時代に頻繁に行なわれ、上記の取り決めにも拘らず、これ以降も行なわれ、市場の混乱に拍車を掛けた。⁽⁴³⁾ 穀物騒動が多発し、その結果、次第にムフタシブと総督の職掌が互いに補充しあうようになったと考えられる。前述の Sa'd ad-Dīn Ibn al-Bargī の抗議のようなものは、後には聞かれなくなった。換言すれば、後にみられるヒスバ職と総督職の兼任というパターンは、この時期に、その萌芽があったといえよう。

Sadr ad-Dīn Ibn al-Adami (no. 112) は、ムフタシブと大法官を兼任した最初の人物である。⁽⁴⁴⁾ 彼については、任命したスルタン al-Mu'ayyad Shaykh の改革政策の一環として考えねばならない。Sadr ad-Dīn Ibn al-Adami は、スルタンと共にシリアからエジプトに來た人物で、ダマスカスで軍務長官、書記、法官の職を歴任し、スルタンの信任厚く、815/1412年エジプトのハナフィー派大法官となり、翌年ムフタシブとなった。スルタンは、宗教職の最高位を占める彼の任命によって、ヒスバ職の再建を計ろうとしたと思われる。

史料にみえる当時のムフタシブは、物価問題以外に、市場の住民に、彼らの負担で、法学者からコーランの開扉

の章その他礼拝に必要な知識を教わるようにと指示したり、また、アザーンの文言に指示(46)を与えたりしている。また、ユダヤ教徒とキリスト教徒に課された人頭税 (*Jizya*) 徴収のための名簿の作成にも、軍事法官と共に携わった。(47)

四

スルタン al-Mu'ayyad Shaykh がスルタン az-Zahir Barquq のイムーン出兵のイミーム Mankali Bughā (no. 113) を任命した意図は不明である。しかし、彼の経歴を調べると、以前に重要な職を歴任し、法律にも詳しくあった故に、その能力が評価され、ヒスバ職に就けられたと思われる。al-Mu'ayyad Shaykh は軍隊制度の改革を行なっているが、(48) 同様に、ヒスバ職に前述の Sadr ad-Din Ibn al-Adami (no. 112) や、(49) Mankali Bughā という側近を任命することで改革を計ったと思われる。

al-Qalqashandi は、(50) Mankali Bughā のムンタシブ任命を画期として、「ヒスバ職は、彼以前はウラマー (muta'ammimin) や文官 (arbab al-aqlām) が就くものであったが、彼以降は、カイロのヒスバ職はカイロ総督に、フスタートのヒスバ職はフスタート総督に帰属した」と述べている。(51) Mankali Bughā (no. 113) 自身はカイロ総督になつていたので、これは次の Taj ad-Din al-Qāzāni (no. 114) を指しているのかも知れない。Taj ad-Din al-Qāzāni (no. 114) は、ヒスバ職とカイロ総督職と侍従職を兼務し、また、ムンタシブ、'Alā'ad-Din Aqbughā Shayfān (no. 123) は、カイロ総督と財務諸官并監督を兼務して居る。(52) しかし、Taj ad-Din al-Qāzāni (no. 114) は

降全てのムフタシブがカイロ総督であるということはないので、前述の al-Qalqashandi の記述は、軍人がヒスバ職を担当することの端緒が、この時期に開かれたという意味であろう。以前には、宗教職であるヒスバ職と軍事職であるカイロ総督職と、名目上にせよ区分されていた二つの職務が、軍人がヒスバ職に就くようになったことから、その区分が曖昧となつていった。

しかし、この影響が典型的に現われるのは、スルタン al-Asraf Barsbay の時代以降であつて、またこのときには、ヒスバ職を通じて民政の安定を計るというスルタン al-Mu'ayyad Shaykh の政策に基づいて、側近による改革が行なわれたと考えられる。

スルタン al-Mu'ayyad Shaykh 自らヒスバ職の職務を掌る (no. 117) ことになつたのは、818/1415—6年の穀物危機のためであつた。同年、ナイルの増水は正常で上エジプトの穀物収穫も豊かであつたが、カイロでは物価高が起きた。その原因として、遊牧民の反乱とそれに対する軍隊の出動、道路の治安の悪化、当時穀物が不作であつたヒジャーズ地方とシリア地方への上エジプトからの穀物輸送によつてカイロに充分な穀物が到着しないのではなかつたかという疑心暗鬼があげられている。この時、カイロにおける穀物騒動の常として、住民がパン焼き屋に詰め掛けるという事態になつた。ムフタシブ (Taj ad-Din al-Qazani (no. 114) と後 G Shams ad-Din al-Halawi (no. 115)) が、穀物価格の値上げを禁じたが、それは、上エジプトの小麦取扱人 (ahl as-Said) のカイロへの小麦供給の停止を招いた。すると、カイロ住民は、カイロのナイル川からの荷揚げ場であるブーラークに殺到し、また、ある者はパン焼き屋に殺到して大混乱となつた。スルタンは、シリア遠征をしていたが、この知らせを聞き、カイロに戻り、物

価は神の手にあるものとの理由で、住民にパン焼き屋に殺到することを禁じた。スルタン自ら物価問題を解決しようとしていることで、カイロの情勢は小康状態を続けた。スルタンは貨幣改革を行ない、貧民に金を分け与え、また国庫長官 (kharidar) と仲買人を、上エジプトに派遣し、小麦の買い付けを命じた。⁽⁵³⁾ このような異例のスルタンの介入について、当時の歴史家は、これを彼の善行の一つに数えている。これは、スルタンのヒスバ職に対する考えを示すとともに、ヒスバ職の改革をめざす彼の施策の帰結であったといえよう。

ヒスバ職を通じて、カイロの民政の安定をめざした例として、Sadr ad-Din al-'Ajami (no. 126) の任命があげられる。822/1419年は、ペストが蔓延した年であった。ウラマーである彼がムフタシブに就任すると、知識と徳がある人物ということ、人びとに歓迎された。⁽⁵⁴⁾ 彼は日食 (Eclipse) の祈りを助手を通じて市場に触れ回らせ、これを整然ととり行なわせた。⁽⁵⁵⁾ また、ペストによって荒廃した地区をカイロ総督とともに視察し、治安や風紀の取締りについでに指令を下した。⁽⁵⁶⁾ ペスト退散を祈り、カイロにおける三日間の断食とスルタン al-Mu'ayyad Shaykh 自らも参加した郊外の砂漠における礼拝を指導したのも彼であった。ペストの蔓延という異常事態のなかで、ヒスバ職の宗教的側面が想起され、これに呼応して Sadr ad-Din al-'Ajami は、治安の維持、風紀の取締りなど精神的に活動した。したがって、民衆は、彼の追い落としを企てた法官に反対し、「我々は、このムフタシブ以外のムフタシブは望まない」という声をあげたといわれる。⁽⁵⁸⁾

al-Mu'ayyad Shaykh 時代の末期のムフタシブ Sarim ad-Din as-Sagiri (no. 127) については、次のように言われている。彼は一、〇〇〇 dīnar を支払うという条件で任命されたが、それは、商人その他から徴収されるも

のであった。⁽⁸⁹⁾ また、別の史料には、当時ヒスバ職は、賄賂 (ishwa) などを支払って就く職であったとある。⁽⁹⁰⁾ これは、前節の後半部で考察した賄賂によるムフタシブの任命も依然として続けられていたことを示す。

このようなヒスバ職の構造を改革しようとした動きが、次の Sadr ad-Din al-'Ajami (no. 128) の任命の記述からうかがわれる。824/1421年フミール Tatar は、彼をムフタシブに任命すると、先ず八〇 dīnār を与え、毎日、人頭税斤 (divān al-jawālī) から、一 dīnār (別の史料には二 dīnār) が給与として与えられるとした。そして、「市場に設けられた」メンチ (ad-dikka) を廃止し、ムフタシブが商人から金を徴収することをやめさせ、「市場のいかなる者にも圧迫を加えてはならない。もし、そうであれば、ズワイラ門に掛ける」と言ったと伝えられている。すなわち、これまで市場の ad-dikka で商人から徴収されていた金の代りに、人頭税から、毎日一 (あるいは二) dīnār が支給されるようになったのである。ここで注目すべきは、一日一 dīnār (又は二 dīnār) というムフタシブの給与である。筆者は第二節において al-Maqrīzī のムフタシブの規定を見たが、彼はムフタシブの給与として毎月三〇 dīnār と述べている。またカイロ総督との関係などの記述を考えれば、al-Khitā' の著作年代(820—840/1417—1437)からみて、al-Maqrīzī は、このフミール Tatar の改革を理想とみなして記述したと思われる。⁽⁹¹⁾ 市場の疲弊を防ぎ、ヒスバ書の規定にあるように支配者からの給与を与えるというこの改革は、賄賂として使われている金額と比較すれば、必ずしも現実的な施策ではなかった。翌年 Badr ad-Dīn al-'Aynī (no. 131) が Sadr ad-Dīn al-'Ajami (no. 130) に代ってムフタシブとなったとき、「ムフタシブに属する一日にシャワリー税からの二 dīnār のうが、一 dīnār は、前任者の al-'Ajami のものとした」⁽⁹²⁾とあるが、これは所期の意図に反して、その給与をも、賄賂の

対象とされたことを示している。

次に、スルタン al-Ashraf Barsbay 時代についてであるが、828/1424年、小麦価格が上昇したため、パンが市場からなくなり、穀物騒動が起きた。スルタンは、民衆によるムフタシブ Badr ad-Din al-'Ayni (no. 131) の罷免要求をはねつけ、彼を擁護し、却ってアミールの一団をおくり、抗議した人びとを捕えた。⁽⁶⁴⁾これは、al-'Ayniがスルタンとの個人的つながりによって結ばれていたからだと言われている。以降、マムルーク朝末期まで、以前においてはよく見られた穀物騒動によってムフタシブが免職されるということが少なくなっていく。このスルタンは、専売政策や小麦の投機をしばしば行ったが、当時のムフタシブは、それを実行に移す役目を負っていた。例えば、Sayf ad-Din an-Nasri (no. 132) は、小麦の高価格を利用し、先ず、フスタートやブーラクに到着する小麦商人 (Jullab al-qamh) に売買を禁じる一方で、スルタンの穀物倉にある小麦を売却した。その後で、小麦商人に売却を許可したが、カイロの粉引き屋やパン焼き屋には、スルタンから購入した小麦が溢れ、そのため価格は下落した、とある。⁽⁶⁵⁾

この時代のムフタシブの経歴を調べると、同じ軍人ではあっても、スルタン al-Mu'ayyad Shaykh 時代とは違っている。その相違とは、一〇人長で護衛長官 (ra's narba) である人物が、ムフタシブに就任していることであり、それは、スルタンの施策を実行するに相応しい人物が現われていることである。

遂には、「ムフタシブはムスリム」であるという要件も無視されるに至った。841/1437—38年は、ハストが蔓延した年であった。スルタン al-Ashraf Barsbay は、「ヒスニ職に活動的な (ahid) 人物を就けよう」とし、「非ムス

リムで神を恐れない」と言われた Dawlat Khujia (no. 135) を任命した。彼は、スルタン az-Zahir Barquq の最年少の मामルークの出身で、以前、カイロ総督であったときには、強圧的な手段を講じたことで有名であった。彼はムフタシブに就任すると、当時、ペストの原因は風紀の乱れにあると考えられていたので、女性の外出禁止など厳しい命令を下し、この故に、人びとから恐れられた。また、ズィンマの民のうち、スルタン al-Ashraf Barsbay 時代に死亡した者の名簿を作成し、彼らの財産を没収した。⁽⁶⁶⁾ 以前のペスト蔓延時に活躍した Sadr ad-Din al-'Alami (no. 126) の行動と比較すれば、ヒスバ職をめぐる状況の変化が明らかであろう。

軍人以外の出身でムフタシブに就任した人物について、例えば、Yar 'Ali (no. 139) は、Khānqāh Siryāqūs のシャイフ職にあったときに財産を作ったと言われ、品行が悪いことで名高く、ムフタシブ在任中にも、「以前にはなかった商人や職人へ(自分に支払われるべき金額の)割りあてを行なった」と非難されている。⁽⁶⁷⁾ このように、宗教層からムフタシブになっている例は、この時期にも見られるが、すでにヒスバ職はスルタンやアミールにとっては容易に資金が調達できる職であり、ムフタシブにとっては、上納金の分を差し引いても、個人の利得を計ることができる職であったと思われる。⁽⁶⁸⁾

スルタン al-Ashraf Inal の時代 (867—865/1453—61) とスルタン az-Zahir Khushqadam の時代 (865—872/1461—67) は、スルタンの मामルーク (Julban) の横暴が顕著になり、これが मामルーク朝の弱体化を促す一つの原因となったといわれている。⁽⁶⁹⁾ スルタンにより密接に結びついていた当時のムフタシブは、彼らの攻撃の矢面に立つことになった。例えば、彼らに、鎖帷子を要求されたり、衣類の高価格の不満をうけたりしている。⁽⁷⁰⁾ 862/1458年、ス

ルタンのマムルークは、軍務・財務長官 (*na'ir al-jaysh wal-khass*) に、衣類が高価格であることに抗議した。その時、彼は、それはムフタシブ *Salah ad-Din al-Makini* (no. 152) の責任であるとし、スルタンはこのムフタシブを免職した。これは、以前は、軍務長官の職域であったスルタンのマムルークの衣類や武具の調達⁽⁷¹⁾の責任がムフタシブにあるとされていたことを示しているであろう。

スルタン *al-Ashraf Qaytbay* 時代 (872—901/1468—96) にも、強制販売が行なわれている。ムフタシブは、スルトンの意向をうけ、有力アミールとの力関係を考慮しつつ、この施策を実行に移した。894/1489年、人びとはスルタンに請願書 (*qas'a*) を提出し、物価問題について当時のムフタシブ *Kabbay az-Zayni* (no. 167) の責任を問うた。彼は免職にはならなかったが、罰せられ、城から戻ると、市場に火を付け、また小麦仲買人にも強圧的手段をとった。これと同様なことは前述した *al-'Ayni* (no. 131) の時にも見られたことではあるが、今回は軍人であるムフタシブ自身により、抗議した人びとに圧迫を加えている。以前は、民衆のムフタシブに対する免職要求は、多くの場合に受け入れられ、新しいムフタシブが就任するというように、支配権力とムスリム社会の間の仲介者の役割も果していたヒスバ職は、大きくその性格を変えたことを示しているといえよう。

865/1460年⁽⁷²⁾に、*Tanam Rusas* (no. 156) はムフタシブに任命されたが、彼は、毎月、金を支払うということ (*badh*) で任命された最初のマムルーク (*turk*) とされている⁽⁷³⁾。また、彼は商人から賄賂 (*barid*) をとることで利益を得るためにヒスバ職に就いたと言われる⁽⁷⁴⁾。この記述は、922/1516年の *Ibn Iyas* の記事と対応する。それは、「以前は、ヒスバ職と総督職は、つまらなく (*aqall*) 職であって、マムルークの子孫 (*abna' an-nas*) や法学者

(Fungalia)の多くが、その職に就いたものであった。しかし今や、この二つの職は重要な(26)職となった。これらの職を手に入れるために使われる多額の金は、ムスリムを惑わし、彼らの血から得られたものであった(26)というものである。すなわち、この時代ムフタシブとなった軍人の中には、badhlという方法で金を請負い、この職に任命されていた人物もいたことがわかる。そして、これは、スルタン al-Ashraf Qaytbay 時代、遅くとも872/1467年までに、⁽²⁶⁾月単位に徴収する市場税(mushahara)と制度化され、その徴収にはムフタシブが当ることになったものと思われる。

マムルーク朝末期にムフタシブとなった Barakat b. Mīsa (nos. 177, 179, 181)は、当時の他のムフタシブが十人長やカイロ総督のような軍人であったのと違い、910/1505年ムフタシブに任命された時には、文民の有力者(a'yān ar-rū'asā')の一人であった。⁽²⁷⁾彼の父は遊牧民(arab)であり、彼自身はスルタン al-Ghuri (在位 906—922/1501—1516)の執行使(bardadar)として勢力を得た人物である。⁽²⁸⁾彼は914/1509年、一回目のエモン職(nō. 177)から免ぜられたとき、その他に一六の職務を担当していたといわれているが、⁽²⁹⁾スルタン al-Ghuriは、彼をヒスミ職に任命し、ジュルバーンなどによる市場の混乱を収めようと計ったと思われる。彼については、免職される度に、彼の復職が、カイロの人びとにより要求されると伝えられているが、⁽³⁰⁾これもその傍証となる。922/1516年、彼はムフタシブ(nō. 179)としてスルタン al-Ghuriの布告を市場に触れ回った。その内容は、ムフタシブが市場から徴収する月単位の市場税(mushahara)、週単位の市場税(mu'jama'a)、その他の諸税(muktas)の廃止などであった。⁽³¹⁾この市場税は、910/1504—5年にペストがカイロを襲ったとき一時的に廃止され、919/1513年には、民衆

の反対とマムルークの横暴による国家の疲弊を恐れて再び廃止された。ところが、同年、銅貨の秤量貨幣化政策に對して民衆の反対運動が起きたことを契機として、再び、この税が徴収された。しかし、これらの諸税のために物価が高騰し、ジュルバーンが反乱を起⁽⁸²⁾したため前述の最終的な廃止となったものである。その廃止時には、*musāhara* からは毎月二、〇〇〇 *dinar* 以上、そして、その他の諸税を合算すると毎年約七六、〇〇〇 *dinar* の税収入があったといわれている。これらの税収入はスルタンのもと (*al-khazā'in ash-sharī'a*) に納められ、イクターを持たないアミールに給与として支給された。したがって、商人はその支払い分を捻出するために物価を引き上げ⁽⁸³⁾た。このような市場税は、スルタン *al-Ghūrī* の時代に新たに設けられたといわれるが、それはイクターを持たないアミールへの給与支払いのためと指定されたのが、このスルタンの時代であったという意味であろう。

しかし、同年スルタンのマムルークである *Mamāy as-Sughayr* (no. 180) がムフタシブに任命された時、一五、〇〇〇 *dinar* を支払ってヒスバ職を得ていることを考えると、スルタンは *badhl* という形で上納金を受けとり国庫収入の増加を計ったと考えられ、一方ムフタシブの方は、おそらくそれを上回る金額を市場から収奪したのである。また、政府は、近づきつつあるオスマン軍との戦いの準備のための資金を調達する必要にも迫られていたのである。

五

以上、マムルーク朝時代におけるカイロのムフタシブについて論述したが、以下に各時期の特徴についてまとめ

てみよう。

初期から Jamāl ad-Dīn al-'Ajamī (no. 30) (789/1387) までの時代は、アミールの介入などはあったものの、ムフタシブは法官または法律に詳しい人物が任命された。その任免には民衆の意志が尊重され、ムフタシブは支配権力者と民衆の仲介者としても機能していた。

次に Sadr ad-Dīn Ibn al-'Ādamī (no. 112) (816/1413) までの時代は、スルタンやアミールはムフタシブの任免権を保持していることを利用し、*badhī* という一種の市場税の請負いから資金調達を計った。ウラマーがムフタシブになることは少なくなり、スルタンの側近で軍人以外の者が多くムフタシブとなった。また、この時代には穀物騒乱が頻発し、そのために次第にムフタシブとカイロ総督の職務が互いに補完するものとなった。しかし依然として、ウラマー以外の人物がヒスバ職に就くことは、民衆によって忌避され、特に穀物騒乱のときにはウラマーが抜擢された。

al-Mu'ayyad Shaykh は、ヒスバ職を通じて民政の安定を計り、大法官あるいは有能な人物をムフタシブに起用した。しかし、宗教職であるヒスバ職に軍人を起用したことは、後のヒスバ職がスルタンの側近の軍人に占められる端緒が開かれた。同じく Tatar によるムフタシブ制度の改革は、その後継者がなく、短命であった。

次に、al-Ashraf Barsbay 以降は、十人長で護衛長官である人物がムフタシブに起用され、穀物の投機政策に加担し、市場を混乱させた。末期には、軍人が *badhī* を用いてムフタシブに任命されるということもみえる。それは、スルタンやアミールにとつて、容易な資金調達の手段であった。後にみられる市場税は、イクターを持たない

アミールの給与にも充たさせるために整備されたものであろう。市場税は al-Ghari のときに廃止されたが、再び Badli という形での市場からの収奪が続けられた。

789/1387 年から 816/1413 年に至る時期は、前述のようた、ムフタシブ制度によって、一つの転期であった。これはナーシル検地により完成した体制が変容していき、崩壊する時期と一致する⁽⁸⁸⁾。また、al-Mu'ayyad Shaykh の時代は、マムルーク朝の物価変動の激しい時期の一つにあたっている⁽⁸⁹⁾。本稿で試みたムフタシブ制度の時期区分を、各期にわたって、さらに総合的な見地から再検討していくことが今後の課題とならう。

表 1

ムフタシブ 名 前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
1 'Abd al-Wahhāb b. Khalaf b. Badr, Tāj ad-Dīn, al-'Alāmī, Ibn Bint al-'Azz 3 の父	(614-665/1217-67)		663 以前—663
2 'Umar b. 'Abd Allāh b. Salīh b. 'Isā, Sharaf ad-Dīn, as-Sabkī	(585-669(667)/1190-1271(1268))		(663)—
3 Ahmad b. 'Abd al-Wahhāb b. Khalaf, 'Alā' ad-Dīn al-'Alāmī 1 の息子	(—699/—1299)		在職時期不明
4 Hasan b. Naṣr b. Husayn b. Jibrīl, Badr ad-Dīn, al-'As'īrdī 6 の兄弟, 7 のいとこ	(—710(709)/—1310(1309))		在職時期不明
5 'Isā b. 'Umar b. Khalīd b. al-Khashab, Mufīd ad-Dīn, al-Makhzūmī, (638-711/1240/1-1311)			678 Dhū al-Hijja 23 —
6 Abū Bakr b. Naṣr b. Husayn b. Hasan b. Husayn, Zayn ad-Dīn, al-			

As'iridi 4の兄弟, 7のいとこ (720/ -1320)	—720 Ramadān 19死亡
7 Muḥammad b. Ḥuseyn b. 'Alī, Najm ad-Dīn, al-As'iridi (al-Is'iridi) 4と6のいとこ (-737/ -1336)	720 Ramadān 16 —
8 Yūsuf b. Abī Bakr b. Muḥammad, Diyā' ad-Dīn, ash-Shāmi, Ibn Khatīb Bayt al-Ābār (689-761/1290-1360) (3回)	737 Jumada I (Sha'ban 7) —738 Rajab 3 (Rabi' II)
9 'Alī b. Ḥuseyn b. Muḥammad, Sharaf ad-Dīn, ash-Sharif, Ibn Qādi al-'Askar (691-757/1292-1356)	738 Rajab 3 —742
10 8と同一人物	742 Jumādā I 3 —748
11 'Alī b. Muḥammad b. al-Aṭrūsh, 'Alā' ad-Dīn, as-Saqati (-758/ -1357) (2回)	(748) —752 Muḥarram 14
12 8と同一人物	752 Muḥarram 14 —Ramadān
13 11と同一人物	752 Ramadān —758 Jumādā II 死亡
14 Muḥammad b. aṣ-Ṣāhib b. Saīim, Shams ad-Dīn (-758(760)/ -1357(1359))	758 Jumādā II —Sha'ban
15 Ibn 'Arab, Qutb ad-Dīn (不明)	758 Sha'ban —759 Ramadān
16 'Abd ar-Raḥīm b. al-Ḥasan b. 'Alī, Jamāl ad-Dīn, al-Isnāwī, al- Umawī (704-772(777, 793)/1305-1370(1375, 1391))	759 Ramadān —762
17 Ibrahim b. Muḥammad b. Abī Bakr, Burhān ad-Dīn, al-Akhnā'i,	762 Rabi' I

アラビア名 前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
al-Sa'di	(-777/ -1375)		—763 Šafar 12
18 Muḥammad b. 'Abd Allāh b. Ibrāhīm, Salāḥ ad-Dīn, al-Burullūsī	(699-765/1299/1300-1363)		763 Šafar 12 —765 Šafar 20 (25) 死亡
19 'Alī b. 'Abd al-Wahhab b. Uthmān, 'Ala' ad-Dīn, Ibn 'Arab	(-780/ -1379) (2回)		765 Šafar 29 —769 Rabi' I 17
20 Muḥammad b. aṣ-Ṣadr b. 'Umar, Muḥyi ad-Dīn, Ibn aṣ-Ṣadr	(-769/- 1368)		769 Rabi' I 17 —Rabi' 16
21 19と同一人物			769 Rabi' 16 —775 Rabi' II 11
22 Muḥammad b. Muḥammad b. al-Mufasssīr, Bahā' ad-Dīn, al-Artāhī, al-Miṣri	(698-778/1298/99-1376)		775 Rabi' II 11 —776 Jumādā I 23
23 Muḥammad b. Aḥmad b. 'Abd al-Malik, Shams ad-Dīn, ad-Damiri	(-813/ -1411) (3回)		776 Jumādā I 23 —778 Dhū al-Qa'da 18
103の父			778 Dhū al-Qa'da 19 (20) —779 Rabi' I 23
24 Maḥmūd b. Muḥammad b. Dāwūd, Jamāl ad-Dīn, al-Qaysari, ar-Rūmī al-'Ajami, Abū al-Thana' (799/ -1396) (4回)			779 Rabi' I 23 —Rabi' II 6
25 23と同一人物			779 Rabi' I 23 —Rabi' II 6
26 24と同一人物			779 Rabi' II 6 —782 Rabi' I 13
27 23と同一人物			782 Rabi' I 13 (14) —Jumādā II 23

28 24と同一人物	782 Jumādā II 23 —783 Sha'bān 4
29 Muḥammad b. Muḥammad b. Muḥammad al-Miḥjī, Tāj ad-Dīn, Ṣā'im ad-Dahr 30 24と同一人物	783 Sha'bān 5 —Dhū al-Qa'da 30 783 Dhū al-Qa'da 30 —789 Ramaḍān 25 (5)
31 Muḥammad b. 'Umar, Najm ad-Dīn, al-Ḥanbūdī (al-Ḥanbādī) (-796/ -1393)	789 Ramaḍān 25 (5) —791 Shawwāl 11
32 'Umar b. Mansūr b. Sulaymān, Sirāj ad-Dīn, al-Qirīmī, al-'Aḥamī (-800/ -1397) (3回)	791 Shawwāl 12 —792 Ṣafar 21
33 31と同一人物 (-809/ -1406)	792 Ṣafar 21 —793 Ramaḍān 8
34 Muḥammad b. al-Burjī, Bahā' ad-Dīn (Shihāb ad-Dīn) (-824/ -1421) (4回)	793 Ramaḍān 8 —794 Rabī' II 25
35 31と同一人物	794 Rabī' II 25 —Dhū al-Qa'da 7
36 34と同一人物	794 Dhū al-Qa'da 7 — 797 Ramaḍān 16
37 Muḥammad b. Muḥammad, Sharaf ad-Dīn, ad-Damāmīnī, al-Iskandarī (-803/ -1400) (3回)	797 Ramaḍān 16 —798 Ṣafar 4
38 'Alī al-Qūr (al-Fūr), Nūr ad-Dīn, al-Jizī (不明)	798 Ṣafar 4 —Ṣafar 27

ムラタツゾ 名 前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
39 37と同一人物			798 Şafar 27 —Jumādā II 26
40 Muḥammad, Shams ad-Dīn, al-Mukhtāṣi (al-Bijānāsi) as-Sa'īdi, al-Anṣārī	(-806/ -1403) (6回)		798 Jumādā II 26 —799 Şafar 17
41 37と同一人物			799 Şafar 17 (Rabi' I 2) —Rabi' I 9
42 34と同一人物			799 Rabi' I 9 —Rabi' II 3
43 40と同一人物			799 Rabi' II 3 —800 Sha'ban 28
44 34と同一人物			800 Sha'ban 28 —801 Muḥarram 9
45 40と同一人物			801 Muḥarram 9 (Şafar 18) —Raiab 11
46 Aḥmad b. 'Alī, Taqī ad-Dīn, al-Maqrīzī, al-Ba'labakkī, al-Miṣrī	(766-845/1364-1442) (3回)		801 Raiab 11 —Dhū al-Ḥijja 1
47 Maḥmūd b. Aḥmad b. Mūsā, Badr ad-Dīn, al-'Aynābī, al-'Aynī	(762-855/1361-1451) (8回)		801 Dhū al-Ḥijja 1 —802 Muḥarram 2
48 Muḥammad b. 'Umar, Jamāl ad-Dīn, al-'Fanbudī, Ibn 'Arāb	(不明) (2回)		802 Muḥarram 2 —Rabi' II 14
49 47と同一人物			802 Rabi' II 14

50	46と同一人物		—Jumādā I 16 (18)
			802 Jumādā I 17 (18)
			—Sha'ban 10
51	48と同一人物		802 Sha'ban 10
			—Shawwāl 14
52	40と同一人物		802 Shawwāl 14
			803 Rabi' II 14 (10)
53	47と同一人物		803 Rabi' II 14 (10)
			—Jumādā II 7
54	40と同一人物		803 Jumādā II 7
			—804 Rabi' I 18
55	Muhammad b. ash-Shāzī, Shams ad-Dīn, al-Iskandarāni	(-810/ -1407) (3回)	804 Rabi' I 18
			—805 Jumādā II 3
56	Muhammad b. Nu'mān (Muhammad), Karīm ad-Dīn, al-Hūwī, al-Miṣrī	(-813/- 1410) (10回)	805 Jumādā II 3
			—Sha'ban 12
57	Muhammad b. Sha'ban, Shams ad-Dīn, al-Jābi	(-844/- 1441) (20回)	805 Sha'ban 12
			—Ramadān 11
58	55と同一人物		(805 Ramadān 11)
			—806 Muharram 10
59	57と同一人物		806 Muharram 10
			—Rabi' I 6
60	40と同一人物		806 Rabi' I 6

ムフタマツノ 名前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
61 56と同一人物			—Jumāda I 1 (2) 806 Jumāda I 1 (2)
62 55と同一人物			—Jumāda II 7 806 Jumāda II 7 (Jumāda I 7)
63 57と同一人物			—Sha'ban 23 (16) 806 Sha'ban 23 (16)
64 56と同一人物			—Shawwāl 4 806 Shawwāl 4
65 57と同一人物			—Dhū al-Qa'da 1 806 Dhū al-Qa'da 1
66 56と同一人物			—Dhū al-Qa'da 4 806 Dhū al-Qa'da 4
67 Muḥammad b. Sa'īd b. 'Abd Allāh, Shams ad-Dīn, Suwaydan al-Aswad	(-832/ -1428)		—807 Muḥarram 14 807 Muḥarram 14
68 46と同一人物			—Shawwāl 22 807 Shawwāl 22
69 'Abd al-Wahhāb b. al-Jabbās, Tāj ad-Dīn (Shams ad-Dīn), al-Misrī	(-824/ -1421) (2回)		—Dhū al-Qa'da 21 807 Dhū al-Qa'da 21
70 57と同一人物			—Dhū al-Hijja 11 807 Dhū al-Hijja 11
			—Dhū al-Hijja 13

71 69と同一人物	807 Dhū al-Hijja 13 —808 Muḥarram 2
72 Aḥmad b. Maḥmūd b. Muḥammad, Ṣadr ad-Dīn, al-Qaysarī (al-Qaysarī), al-'Ajami, Ibn al-'Ajami (-833/ -1430) (6回)	808 Muḥarram 2 —Safar 9
73 57と同一人物	808 Safar 9
74 72と同一人物	—Safar 28 (27)
75 56と同一人物	808 Safar 28 (27) —Rabi' I 12
76 Muḥammad b. 'Alī b. al-Mu'allima, Shams ad-Dīn, al-Iskandarānī (-833/ -1430) (2回)	808 Rabi' I 12 —Jumādā II 28
77 57と同一人物	808 Jumādā II 28 —Ramaḍān 14
78 76と同一人物	808 Ramaḍān 14 —Ramaḍān 16
79 56と同一人物	808 Ramaḍān 16 —Ramaḍān 24
80 57と同一人物	808 Ramaḍān 24 —Shawwāl 20
81 56と同一人物	808 Shawwāl 20 —Dhū al-Qa'da 5
	808 Dhū al-Qa'da 5 —809 Muḥarram 3

ムラタシマ 名 前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
82 Muhammad b. 'Abd al-Khalīq, Shams ad-Dīn (Tāj ad-dīn), al-Munāwī, al-Badana, at-Tawīl	(-813/ -1410)	(6回)	809 Muharram 3 —Rabī' I 1
83 56と同一人物			809 Rabī' I 1 —Rabī' I 11
84 82と同一人物			809 Rabī' I 11 —Jumādā I 4
85 57と同一人物			809 Jumādā I 4 —Rajab 6
86 82と同一人物			809 Rajab 6 —Rajab 22 (23)
87 Hājī (Imām Julbān), Zayn ad-Dīn, at-Turkumānī, (不明)			809 Rajab 22 (23) —Rajab 27
88 82と同一人物			809 Rajab 27 —Dhū al-Qa'da 16
89 Muhammad b. Ahmad b. 'Alī, Tāj ad-Dīn, Ibn al-Mukallīa, Qarīb b. Jamā'a	(-829/ -1426)		809 Dhū al-Qa'da 16 —Dhū al-Qa'da 24
90 57と同一人物			809 Dhū al-Qa'da 24 —810 Šafar 17
91 82と同一人物			810 Šafar 17 —Rabī' I 10
92 57と同一人物			810 Rabī' I 10

93	Muḥammad b. 'Alī, Sharaf ad-Dīn, al-Ḥīrī (al-Jizānī) (al-Ḥībī), as-Sukkarī, Ibn al-Ḥīrī	(-823/- 1420) (2回)	—Dhū al-Ḥijja 24 810 Dhū al-Ḥijja 24 —812 Muḥarram 7 812 Muḥarram 7 —Muḥarram 13 812 Muḥarram 13 —
94	57 と同一人物		
95	93 と同一人物		
96	57 と同一人物		—812 Jumādā II 9
97	82 と同一人物		812 Jumādā II 9 —Raiab 7 812 Raiab 7 —Raiab 18
98	57 と同一人物		812 Raiab 18
99	Muḥammad b. Ya'qūb, Shams ad-Dīn, ad-Dimashqī, ash-Shāmi	(-831/ -1427) (4回)	—Sha'bān 8 (2) 812 Sha'bān 8 (2) —Shawwāl 13 812 Shawwāl 13 —Shawwāl 24 812 Shawwāl 24 —813 Sha'bān 11 死亡
100	56 と同一人物		813 Sha'bān 12
101	57 と同一人物		
102	56 と同一人物		
103	Muḥammad b. Muḥammad b. 'Abd al-Malik, Zayn ad-Dīn, ad-Damiri		

ムンダシツネ 名 前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
23の息子	(-833/	-1430) (3回)	—Shawwāl 24
104 57と同一人物			813 Shawwāl 25
			—Dhū al-Ḥijja 11
105 103と同一人物			813 Dhū al-Ḥijja 11
			—814 Muḥarram 9
106 99と同一人物			814 Muḥarram 9 (22)
			—Sha‘bān 15 (Ramādān 15)
107 57と同一人物			814 Sha‘bān 15 (Ramādān 15)
			—Dhū al-Qa‘da 19
108 Muḥammad b. Muḥammad, Zayn ad-Dīn, al-Ḥīwī, (Ibn al-Ḥīwī)			814 Dhū al-Qa‘da 19
55の息子	(不明)		—814 Dhū al-Ḥijja 11
109 103と同一人物			814 Dhū al-Ḥijja 11
			—815 Rabī‘ II 11
110 72と同一人物			815 Rabī‘ II 11
			—Dhū al-Ḥijja 28 (29)
111 57と同一人物			815 Dhū al-Ḥijja 28 (29)
			—816 Jumādā I 11
112 ‘Alī b. Muḥammad b. Muḥammad, Ṣadr ad-Dīn, ad-Dīmashqī, Ibn al-Ādamī	(767-816/1366-1413)		816 Jumādā I 12
			—Rabiā 20
113 Mankalī Bughā, ‘Alā’ ad-Dīn, az-Zāhiri, al-‘Ajāmī, ash-Shamsī	(-836/	-1432) (2回)	816 Rabiā 20
			—817 Shawwāl 29

114 (Tāj) b. Sayfa, Tāj ad-Dīn, ash-Shawbakī (ash-Shawkī), ad-Dimashqī, al-Qāzānī	(-839/ 1435) (2回)	817 Shawwāl 29 —818 Shawwāl 19
115 Muḥammad b. Yūsuf b. Šālih, Shams ad-Dīn, al-Ḥalāwī, ad-Dimashqī	(765-840/1363/4-1437)	818 Shawwāl 20 —Dhū al-Qa'da 11 (12)
116 114と同一人物		818 Dhū al-Qa'da 11 (12) —Dhū al-Ḥijja 17
117 al-Mu'ayyad Shaykh, Sayf ad-Dīn, al-Mahmūdī,	(-824/ -1421)	818 Dhū al-Ḥijja 17 —819 Muḥarram 5
118 47と同一人物		819 Muḥarram 5 —Rabi' I 14
119 57と同一人物		819 Rabi' I 14 —Rajab 22
120 113と同一人物		819 Rajab 22 —820 Muḥarram 26
121 99と同一人物		820 Muḥarram 26 —Jumādā II 21
122 'Imād ad-Dīn b. ar-Rashīd,	(不明)	820 Jumādā II 21 (25) —Dhū al-Ḥijja 24
123 Aqbughā b. 'Abd Allāh, 'Alā' ('Alām) ad-Dīn, Aqbughā Shaytān	(-821/ -1418)	(Dhū al-Qa'da 24) 820 Dhū al-Ḥijja 24 (Dhū al-Qa'da 24) —821 Rabi' II 5 (2)

ムラタツゾ 名 前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
124 99と同一人物			821 Rabi' II 5 —Junādā II 20 (Junādā I 21)
125 57と同一人物			821 Junādā II 20 (Junādā I 21) —822 Šafar 5
126 72と同一人物			822 Šafar 5 —823 Raiab 15
127 Ibrāhīm b. Muḥammad b. al-Ḥusām, Šārim ad-Dīn, aṣ-Šaqrī	(-833/ -1430)		823 Raiab 20 (25) 824 Muḥarram 14 (13)
128 72と同一人物			824 Muḥarram 14 (13) —Ramādān 5 (4)
129 Yūsuf b. Khaṭīd b. Na'im, Jamāl ad-Dīn, al-Ṭā'i, al-Bisāṭī	(740-829/1339-1426)		824 Ramādān 5 —Dhū al-Ḥijja 23
130 72と同一人物			824 Dhū al-Ḥijja 23 (25) —825 Sha'ban 22 (21)
131 47と同一人物			825 Sha'ban 22 (21) —829 Muḥarram 1
132 Aynāl ash-Shishmānī, Sayf ad-Dīn, an-Nāsrī	(-851/ -1447)		829 Muḥarram 1 —833 Rabi' II 4
133 47と同一人物			833 Rabi' II 4 —835 Raiab 1
134 Muḥammad b. Ḥasan, Šalāḥ ad-Dīn, al-Adkūwī, al-Fūwī, Naṣr Allāh			835 Raiab 1

838 Shawwāl 18 巡礼に際して父 Badr ad-Dīn がムフタツに任命された。	(790-841/1388-1438)	—841 Ramadān 27
135 Dawlat Khujā, Sayf ad-Dīn, az-Zāhiri	(-841/ -1438)	841 Ramadān 27
136 'Alī b. as-Sawayfi, Nūr ad-Dīn	(-871/ -1467)	—Dhū al-Qa'da 1 死亡
137 Tanam min 'Abd Allāh min 'Abd ar-Razzāq, Sayf ad-Dīn, al-Mu'ayyadi	(-868/ -1464)	841 Dhū al-Qa'da 6
138 47 と同一人物		—842 Rabi' I 22 (20)
139 'Alī b. Nasr Allāh, al-'Ajami, al-Khurasāni, Yār 'Alī, 'Alī aṭ-Tawīl	((780)-862/(1378/9)-1458) (5回)	842 Rabi' I 22 (20)
140 47 と同一人物		—844 Rabi' II 7
141 139 と同一人物		844 Rabi' II 7
142 'Alī b. Muḥammad b. Aqburs, 'Alā' ad-Dīn	(801-862/1398/9-1458)	—845 Rabi, I 3
143 'Alī b. Iskandar, 'Alā' ad-Dīn, al-Ghayṣi (al-Fayṣi)	(831-873/1427/8-1469) (2回)	845 Rabi' I 3 (4)
144 Yahyā b. 'Abd ar-Razzāq, Zayn ad-Dīn, al-Armani, Ashqar b. Kātib Hulwān	(800以前-874/1397以前-1469)	—846 Shawwāl 29
		846 Shawwāl 29
		—847 Šafar 12
		847 Šafar 12
		—852 Dhū al-Ḥijja 22
		852 Dhū al-Ḥijja 22
		—853 Jumādā I 4
		853 Jumādā I 4
		—Sha'bān 2
		853 Sha'bān 2
		—Dhū al-Qa'da 20
		—Dhū al-Qa'da 20

アラビア名	前	(生没年)	(回数)	在 任 期 間
145 Jami'ak b. Abd Allāh, Sayf ad-Din, al-Yashbaki		(-857/ -1453)		853 Dhū al-Qa'da 20 —854 Jumādā I 22
146 139 と同一人物				854 Jumādā I 22 —857 Dhū al-Qa'da 27
147 'Alī b. Aḥmad al-Kashif, Ibn Umm Kharaj		(不明)		857 Dhū al-Qa'da 29 (27) —858 Šafar 15
148 'Abd al-'Azīz b. Muḥammad, aṣ-Ṣughayyar		(816- /1413) (2回)		858 Šafar 15 —Rajab 24
149 139 と同一人物				858 Rajab 24 —859 Jumādā II 15
150 148 と同一人物				859 Jumādā II 15 —Shawwāl 17
151 139 と同一人物				859 Dhū al-Ḥijja (Shawwāl 17) —861 Dhū al-Qa'da 27
152 Aḥmad b. Muḥammad b. Barakūt, Saḫāh ad-Din, al-Makini		(821-881/1418-1476)		861 Dhū al-Qa'da 27 —862 Jumādā I 18
153 al-Ḥajj Khalīf, Qarnibay al-Yūsufī		(-862/ -1458)		862 Jumādā I 18 —Shawwāl 20
154 Ibn al-Būsi, Badr ad-Din		(不明)		862 Shawwāl 20 (28) —863 Šafar 4
155 143 と同一人物				863 Šafar 4

156	Tanam min Nakhsāyish (Bahshāyish, Nakhsahāy'), az-Zāhiri, Tanam Rusūs	(-867/ -1463)	—865 Šafar 6
157	Sūdūn al-Bardaki, al-Mu'ayyadi, al-Faqih	(不明)	—867 Dhū al-Hijja 1
158	Khushkaldi al-Baysaqi	(-908/ -1503)	—870 Rabi' I 7
159	Mughulbāy, Uzun Saqal, az-Zāhiri al-Khushqadamī	(-874/ -1469)	870 Rabi' I 7
160	Ṭarabāy az-Zāhiri, al-Khushqadamī, Ṭarabāy al-Bawwāb	(-874/ -1470)	—872 Rabi' I 以前
161	Qānsūl- al-Khasif (al-Hafif), al-Aynāfi, al-Aḥmadi	(-892/ -1487)	—872 Rabi' II 14
162	Yashbak al-Jamāli, al-Jarkasi	(-901/ -1495) (2回)	872 Rabi' II 14
163	Yashbak min Ḥaydar, al-Aynāfi	(-899/ -1494)	—Junādā II 16 (Rajab)
164	162と同一人物		—Junādā II 16 (Rajab)
165	Qāsim b. Aḥmad b. al-Qarāfi, Shughayra (Jughayra) al-Qāhiri	(833-900/1429/30-1495)	872 Jumādā II 16 (Rajab)
166	Muhammad b. Abi Bakr b. Muhammad, Badr ad-Din, Ibn Muḏhir		—873 Rabi' II 27 (Rabi' I)
			873 Rabi' II 27
			—884 Dhū al-Qa'da
			884 Dhū al-Qa'da
			—(885 Muḥarram)
			(885 Muḥarram)
			—Rabi' I
			885 Rabi' I
			—887 Shawwāl 以前
			(887 Shawwāl 以前)

名前	(生没年)	(回数)	在任期間
167 Kasbāy al-Sharīfī, Kasbāy al-Zaynī	(-919/ -1504)		—891 Dhū al-Qa'da 891 Dhū al-Qa'da —901 Rabī'II
168 Barqūq as-Sāqī, al-Aynālī	(-902/ -1497)		901 Rabī, II —
169 Qurqumās al-Sharīfī	(不明)		—
170 Tambak min Ḥadīd	(-902/ -1497)		—902 Rajab (902 Rajab) —903 Rabī' I
171 Janbalāt al-Muttir (Murththir)	(-903/ -1497)		903 Rabī' I —905 Dhū al-Qa'da
172 Timur min Jānim	(不明) (2回)		905 Dhū al-Qa'da —
173 Qurqumās al-Muqri	(不明)		—
174 Jānbirdī al-Ghazālī	(-920/ -1514)		906 Jumāda II —Shawwāl 6 906 Shawwāl 6 —907 Muḥarram 14 (15)
175 171と同一人物	(不明)		907 Muḥarram —
176 Tamībak (min Yashbak), al-Khazīndār	(不明)		907 Jumāda I —

177 Barakāt b. Mūsā, Zayn ad-Dīn	(不明) (4回)	910 Sha'ibān —914 Ramaḍān 17
178 Yūsuf al-Badrī, Jamāl ad-Dīn	(不明)	914 Ramaḍān 17 —Dhū al-Qa'da
179 177と同一人物		914 Dhū al-Qa'da —922 Safar 9
180 Māmāy as-Sughayr (as-Sughaiyar)	(不明) (2回)	922 Rabi' I 18 —Rabi' II
181 177と同一人物		922 Rabi' II —Ramaḍān
182 180と同一人物		922 Ramaḍān 20 —(923 Muḥarram)
183 177と同一人物		923 Muḥarram 1 —(オスマノ朝)

註

(一) 下記の書名に用いた字の略記を参照せよ。
 Nicola A., *Urban Life in Syria under the Early Mamluks*, Beirut, 1953; Darrag, Ahmad, *L'Égypte sous le règne de Barsbay 825-841/1422-1438*, Damas, 1961; Labib, Subhi Y., *Handelsgeschichte Ä-*

gyptens im Spätmittelalter (1157-1517), Wiesbaden, 1965; Lapidus Ira M., *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, 1967 (『Lapidus (67)』); Ashfor, Eliyahu, *Histoire des Prix et des Salaires dans l'Orient Médieval*, Paris, 1969; Shoshan, Boaz, *Money, Prices, and Population in the Mamluk Egypt*,

1382—1517, Princeton University Ph.D. 論文, 1978

(㉔) Shoshan (78); EI New ed., s. v., HISBA.

- (㉕) Darrāi, Ahmad, “al-ḥisba wa ahārāh ‘alā al-hayāt al-iqtisādīya fī Miṣr al-Mamlūkiya”, *al-Miḥjallat at-Tarḥīḥiyat al-Miṣriya* XV (1968) pp. 109—141 (㉔) Darrāi (68); ‘Abd ar-Rāziq, Ahmad, “La Hisba et le Muhtasib en Égypte au temps des Mamluks”, *Annales Islamologiques*, XIII (1977) pp. 115—178 (㉔) ‘Abd al-Rāziq (77).

- (㉖) al-Maqrizī, *Kitāb Ighāzhat al-Umma bi-Kashf al-Ghūmma*, Cairo, 1940, p. 43; 佐藤次雄「マムルークへの『ロジニト社会政策の書』」(『西ノシムノ史研究』) 深井晋司編 一九七四年 一〇九—二二九頁) 一一八頁。
(4) マムルークの人名のあとに () 内の no. は表 1 の 任意番号を示す。

- (㉗) Ibn al-Ukhuwwa, *Ma‘ālim al-Qurba*, ed. by Levy, Reuben, London, 1938 (㉔) Ma‘ālim al-Qurba), p. 7; al-Shayzari, *Nihāyat al-Rutba fī Talab al-Hisba*, Cairo, 1946 (rep. Beirut 1969), p. 6; al-Maqrizī, *Kitāb al-Marwā‘iz wal-I‘tibār*, 2 vols, Cairo, 1853—4 (rep. Beirut, 1970), (㉔) Khihiat) I. 463; マムルークの『歴史序説』森本公誠訳 第一巻四五一頁。

- (㉘) al-Qalqashandī, *Subḥ al-A‘shā*, 14 vols, Cairo, 1919—22, IV, 37.

- (㉙) Khihiat, I. 464; Ma‘ālim al-Qurba, p. 222 など。マムルークのロジニトに充分な給与 (riḥq) を支払う義務が、*ḥisba* の一環として記述されている。

- (㉚) ‘Abd al-Rāziq (77) など。阿ラビ人としてマムルークの被支配者では、湯川武「マムルーク朝時代初期のロジニト論」(『マムルーク世界』一六、一九七九年) 二二頁参照。

- (㉛) Tāj ad-Dīn al-‘Alāmi (no. 1) マムルークの ‘Alā’ ad-Dīn al-‘Alāmi (no. 3), 著者 Badr ad-Dīn al-As‘irīdī (no. 4), マムルークの Zayn ad-Dīn al-As‘irīdī (no. 6) マムルークの Najm ad-Dīn al-As‘irīdī (no. 7) マムルークの關係者として。表 1 参照。
(11) al-Maqrizī, *Kitāb as-Sulūk li-Ma‘rifat Durwal al-Mulūk*, 4 vols, Cairo, 1934—73 (㉔) Sulūk), II. 394.
(12) Ma‘ālim al-Qurba, pp. 64—5 など。西暦を定めてマムルークの『歴史序説』を参照。

- (13) Sulūk, II. 394—5; Lapidus (67), p. 54.

- (14) Sulūk, II. 414—5; 上の記述は、*ḥisba* の世襲の弊を述べた註文と、*ḥisba* の弊を述べた註文とを参照。著者 Raymond, A et G. Wiet, *Les Marchés du Caire. Traduction annotée du Texte de Maqrizī*, Cairo, 1979, p. 154 参照。
(15) Lapidus (67), p. 99.

- (95) Badā'i, V. 27
 (98) Khitāi, I. 91; SATŌ, T., "The Evolution of the iqfā' system under the Mamluks" *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 37 (1979), p. 124.
 (99) Shoshan, B. (78), pp. 171—212

素一ツノツノの註

全前「生後年」在任期間の欄に於て()は史料によつての異同を表わす。そのリズミは本文の註によつてある史料の記述に於ての相違を参照して作成した。

- Ibn Kathīr, *al-Bidāyat wa-n-Nihāya*, 14 vols, Cairo, 1932 (rep. Beirut, 1966—74)
 al-Yūnīnī, *Dhawl Mir'at az-Zamān*, 4 vols, Heyde-rabad, 1954—61.
 ad-Dawādārī, *ad-Durr al-Fakhīr fī Sīrat al-Malik an-Nāṣir*, Cairo, 1960.
 Zetterstejn (ed.), *Beiträge zur Geschichte der Mamlukensultanen in den 690—741*, Leiden, 1919.
 as-Sakhawī, *at-Tibr al-Masbūk fī Dhawl as-Sulāḥ*, Bulāq, 1896, (rep. Cairo, 1974)

マムルーク朝時代カイロのムフタシム 菊池

al-'Aynī, *as-Sayf al-Muhammād fī Sīrat al-Malik al-Mu'awwād*, Cairo, 1967.

Ibn Taghri Birdī, *al-Manhal as-Safī*, vol. 1, Cairo, 1956.

Wiet, G., *Les Biographies du Manhal Safī*, Cairo, 1932.

al-Kutubī, *Fawat al-Wafayāt*, 2 vols, Cairo, 1951.

Ibn Hajar, *ad-Durr al-Kāminā fī Ayan al-Mīra'ath-Thāminā*, 4 vols. Hyderabad, 1929—30 (rep. Beirut n.d.).

Ibn as-Suqā'i, *Talī Kitāb Wafayāt al-Ayan*, Damas, 1974.

as-Suyūṭī, *Ḥusn al-Muḥadara fī Akhbār Miṣr wa-l-Qāhira*, 2 vols, Cairo, 1968.

素二ツノツノの註

財務職、宗教職、軍事職の区分と各職任の語に付した種々の Popper, W., *Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382—1468 A.D. Systematic Notes to Ibn Taghri Birdi's Chronicles of Egypt, Part I*. Berkeley, 1955 pp. 90—102 を参照して、その語彙を

第六十四巻 一七五

位から並べたものである。番号の付していない職は、筆者が理解を助けるために付加したものである。また、この表はムフタシブになった人物の全ての経歴の中から該当するものを示している。参照した史料は、本文の註と表1の註に記したものである。

